

大学生の大学適応に関する研究Ⅱ  
——入学目的，授業理解，友人関係でみた対象者のタイプと  
大学不適応との関連——

中村 真\*・松井 洋\*\*・田中 裕\*\*\*

A Study on University Adjustment II

Shin NAKAMURA, Hiroshi MATSUI and Yu TANAKA

要 旨

松井・中村・田中（2010）は，女子大学生を対象に大学生活に関する調査を実施し，「入学目的」「授業理解」「友人関係」が大学不適応に影響する要因であることを実証的に提唱した。本稿では，これら3要因が不適応に及ぼす影響をさらに詳細に検討するために，松井・中村・田中（2010）の調査データを追加分析し，大学不適応3要因によって対象者を『授業理解偏向群』『友人関係偏向群』『授業友人充実群』『大学生活充実群』『入学目的偏向群』の5群に分類した。そして，各群で大学不適応・大学満足を比較したところ，『授業友人充実群』と『大学生活充実群』では適応的な大学生活をおくる傾向があるのに対して，『授業理解偏向群』『友人関係偏向群』『入学目的偏向群』においては大学不適応的な傾向がうかがわれた。この結果をふまえて，大学不適応の問題を学生のタイプという視点から検討し，適応を促進するための方策を考察した。

キーワード：大学不適応，大学満足，入学目的，授業理解，友人関係

---

\*准教授 社会心理学

\*\*教授 社会心理学

\*\*\*准教授 生理心理学

## 問題と目的

わが国では、少子化や高学歴化といった社会情勢の変化によって、大学全入時代をむかえている。その激しい変化が大学教育にもたらす影響は少なくないと思われるが、なかでも学生の大学不適應の問題は、大学の現状と将来における最も大きな課題の一つである。

松井・中村・田中（2010）は、首都圏近郊の大学に通う女子大学生を対象に質問紙調査を実施し、大学生の大学不適應に影響する要因を検討した。その結果、大学生の大学不適應に影響する要因は、「入学目的」「授業理解」「友人関係」であることを見出した。具体的には、“入学目的が曖昧ではっきりしない”“大学の授業が難しく理解できない”“大学の友人関係が希薄である”などが、大学生の大学不適應傾向に影響していることを明らかにした。

この調査結果は、目的が明確でない状態で大学に進学しても入学後の充実した大学生活は導かれにくいこと、入学したものの大学の授業レベルについていけなければ授業への参加という大学生活の中核が揺らいでしまうこと、友人関係が希薄であれば大学生に特有の悩みや課題を同じ立場の仲間と語り合い共有する機会が得られず孤独や不安などの不適應反応が生じやすいこと、といった論点を実証的に裏付けるなど大学適応を検討するうえで重要な示唆を与えてくれていることから、その研究知見は一定の成果をもたらしたと言えよう。

その一方で、松井・中村・田中（2010）による知見は大学不適應を検討するうえで新たな課題を導いた。彼らの研究によって、「入学目的」「授業理解」「友人関係」が大学不適應に影響を及ぼすことは明らかになったが、大学生一人ひとりに焦点を絞って考えた場合、目的があつて入学し友人関係も良好であるが授業が理解できない学生や、目的がないまま入学したが友人関係が良好で授業の成績も良いという学生など、学生の実態は多様であることも事実である。つまり、一人ひとりの学生によって3つの要因の高低の組み合わせは異なっていると考えられるが、松井・中村・田中（2010）の知見は、この視点で学生の大学適応を検討するために十分な成果を与えてくれたとは言い難い。

そこで本稿では、松井・中村・田中（2010）の調査データを追加分析し、「入学目的」「授業理解」「友人関係」によって調査対象者を群分け（タイプ分け）したうえで、群ごとに大学不適應および大学満足を比較することによって、大学不適應に影響する要因をさらに詳細に検討する。そして、大学生の大学不適應の問題を大学生のタイプという視点から検討し、大学適応を促進するための方策について提言を行う。

## 方法

### 1. 調査対象者

調査の対象は、東京近郊の大学で一般教育の「心理学」を受講している女子大生184名であった。内訳は、1年生89人、2年生67人、3年生20人、4年生7人である。

### 2. 調査時期

2009年6月に複数の授業において集合調査を実施した。調査は無記名式で行い、かつ、回答はすべて全体的に統計処理されることをフェイスシートに明示した。

### 3. 調査項目

調査内容は、大学適応、勉学に対する態度、個人特性に関する50項目、および、大学入学動機など6項目であった。質問項目の詳細については、松井・中村・田中(2010)を参照されたい。これらの質問について「あてはまる」から「あてはまらない」までの4件法で尋ねた。

このうち、本稿における分析で用いた項目は表1に示した21項目(5因子)であった。内訳は、「入学目的」に関する2項目、「授業理解」に関する3項目、「友人関係」に関する6項目、「大学不適応」に関する5項目、「大学満足」に関する5項目である。なお、これら5つの因子は、松井・中村・田中(2010)における因子分析の結果に基づくものであり、そこで行われた信頼性分析によって次元性が概ね確認されている。表1に掲載した信頼性係数は、松井・中村・田中(2010)から転載したものである。

## 結果

分析に先立って、以下のように変数を得点化した。まず、各質問項目に対する回答を「あてはまらない」を1点、「どちらかといえばあてはまらない」を2点、「どちらかといえばあてはまる」を3点、「あてはまる」を4点とし、逆転項目については「あてはまらない」(4点)・・・「あてはまる」(1点)となるように得点を変換した。

そして、因子ごとに合成得点を算出した。ここでいう合成得点は、因子を構成する全ての質問項目の素得点を合計し、1項目あたりの平均点を算出したものである。合成得点が高いほど、その因子に包含される傾向が高いことを意味する。質問項目および因子の合成得点の平均と標準偏差は、表1に示した通りである。

表1 分析に使用した項目および因子合成得点の平均

因子	項目	平均 (SD)	$\alpha$ 係数
入学目的	なんとなく大学に進学した (※)	2.73 (1.06)	
	はっきりとした目的があって大学に入学した	2.73 (1.04)	
	合成得点	2.73 (.96)	.81
授業理解	大学の勉強についていけない感じだ (※)	2.57 (.93)	
	授業の内容が難しいと思う (※)	2.27 (.90)	
	大学の授業レベルは高すぎると思う (※)	3.01 (.80)	
	合成得点	2.62 (.74)	.79
友人関係	大学で友人と過ごすことが楽しい	3.28 (.90)	
	大学での友人関係に満足している	2.99 (.97)	
	大学の休み時間や昼食時間は楽しい	3.25 (.88)	
	大学に仲のよい友人がいる	3.47 (.80)	
	大学で友人と過ごすことがわずらわしい (※)	3.29 (.88)	
	いろいろと相談にのってくれる友人がいる	3.21 (.82)	
合成得点	3.25 (.71)	.89	
大学不適応	落ち込むことがよくある	3.03 (.95)	
	授業がある日なのに大学を休みたくなることがある	3.19 (.93)	
	大学を卒業できないかもしれないと思ったことがある	2.45 (1.17)	
	疲れを感じる人が多い	3.35 (.73)	
	大学をやめようかと思ったことがある	1.98 (1.17)	
合成得点	2.80 (.64)	.64	
大学満足	大学の勉強に満足している	2.30 (.87)	
	大学生活に満足している	2.58 (.89)	
	この大学に入って正解だったと思う	2.61 (.98)	
	大学にくるのが楽しい	2.55 (.96)	
	この学科に入って正解だったと思う	2.90 (.98)	
合成得点	2.59 (.74)	.85	

(※) 逆転項目

因子ごとに算出した合成得点は、一項目あたりの平均点である。

### 1. 大学不適応 3 要因による対象者の分類

大学不適応に影響する3つの要因、すなわち、「入学目的」因子、「授業理解」因子、「友人関係」因子の合成得点を用いて、グループ内平均連結法によるクラスタ分析を行い、5つのクラスタを得た。第1クラスタには16名、第2クラスタには37名、第3クラスタには31名、第4クラスタには80名、第5クラスタには12名の調査対象者が含まれていた。 $\chi^2$ 検定を行った結果、人数比率の偏りは有意であった ( $\chi^2=83.38$ ,  $df=4$ ,  $p<.001$ )。

次に、5つのクラスタを独立変数、「入学目的」を従属変数とする一要因5水準の分散分析を行った。そして、「授業理解」、「友人関係」を従属変数とした同様の分散分析を実施した。

大学生の大学適応に関する研究Ⅱ

表2 5群ごとにみた大学不適応3要因の平均

大学不適応 3要因	授業理解 偏向群 (n=16)	友人関係 偏向群 (n=37)	授業友人 充実群 (n=31)	大学生生活 充実群 (n=80)	入学目的 偏向群 (n=12)	F 値
入学目的	1.94 (.40) <sup>a</sup>	1.51 (.48)	2.27 (.41) <sup>a</sup>	3.51 (.48) <sup>b</sup>	3.54 (.40) <sup>b</sup>	155.10***
授業理解	2.94 (.49) <sup>a</sup>	1.98 (.44) <sup>b</sup>	2.74 (.79) <sup>a</sup>	2.97 (.55) <sup>a</sup>	1.56 (.54) <sup>b</sup>	30.82***
友人関係	2.08 (.60) <sup>a</sup>	3.27 (.61) <sup>b</sup>	3.59 (.38) <sup>b</sup>	3.47 (.54) <sup>b</sup>	2.38 (.60) <sup>a</sup>	32.81***

多重比較の結果、同じアルファベット文字が上付きに記載されている平均値の間には5%水準で有意差がないことを表す。( )内は標準偏差

\*\*\* $p < .001$

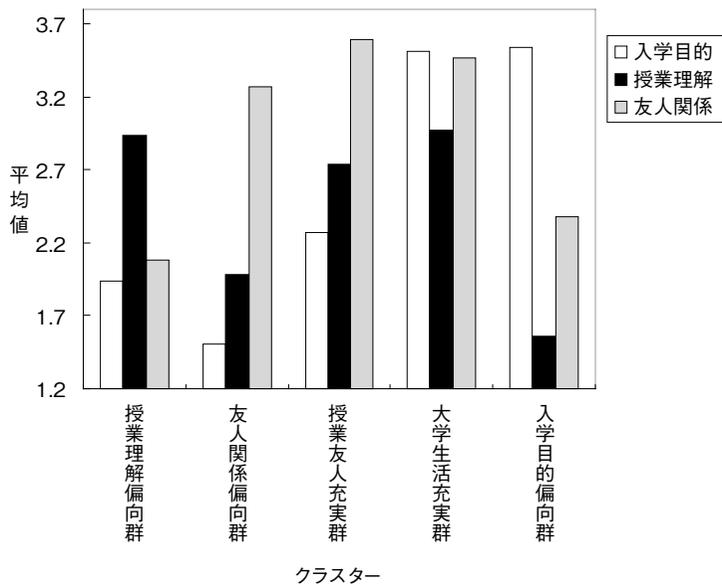


図1 5群ごとにみた大学不適応3要因の得点

その結果、「入学目的」、「授業理解」、「友人関係」ともに主効果が有意であった（「入学目的」： $F(4,171) = 155.10$ ,  $p < .001$ 、「授業理解」： $F(4,171) = 30.82$ ,  $p < .001$ 、「友人関係」 $F(4,171) = 32.81$ ,  $p < .001$ ）。表2ならびに図1に群ごとにみた各得点を示す。TukeyのHSD法（5%水準）による多重比較を行った結果、「入学目的」については、第4クラスタ＝第5クラスタ>第3クラスタ＝第1クラスタ>第2クラスタであった。「授業理解」では、第4クラスタ＝第1クラスタ＝第3クラスタ=>第2クラスタ＝第5クラスタであった。また、「友人関係」では、第3クラスタ＝第4クラスタ＝第2クラスタ=>第5クラスタ＝第1クラスタであった。

第1クラスは、「入学目的」と「友人関係」が低く「授業理解」のみが高いことから、『授業理解偏向群』とした。第2クラスは、「入学目的」と「授業理解」が低く「友人関係」のみが高いので、『友人関係偏向群』とした。第3クラスは、「入学目的」のみが低く「授業理解」および「友人関係」が高いことから、『授業友人充実群』とした。第4クラスは、3つの要因すべてが高いので『大学生生活充実群』とした。そして、第5クラスは、「入学目的」は高いが「授業理解」と「友人関係」が低いので、『入学目的偏向群』とした。

## 2. 「入学目的」「授業理解」「友人関係」に基づく対象者の5タイプと大学不適應の関係

大学不適應3要因の得点を用いてクラス分析を行い、対象者を5つのタイプに分類したが、このタイプの違いによって「大学不適應」および「大学満足」の得点が異なるかどうかを検討するために以下の分析を行った。5つのクラスを独立変数とし「大学不適應」および「大

表3 5群ごとにみた大学不適應および大学満足の平均

	授業理解 偏向群 (n=16)	友人関係 偏向群 (n=37)	授業友人 充実群 (n=31)	大学生生活 充実群 (n=80)	入学目的 偏向群 (n=12)	F 値
大学不適應	3.01 (.57)	3.19 (.54)	2.63 (.55)	2.57 (.61)	3.30 (.56)	11.04***
大学満足	1.95 (.55)	2.25 (.65)	2.59 (.65)	2.92 (.69)	2.33 (.87)	10.97***

( ) 内は標準偏差 \*\*\* $p < .001$

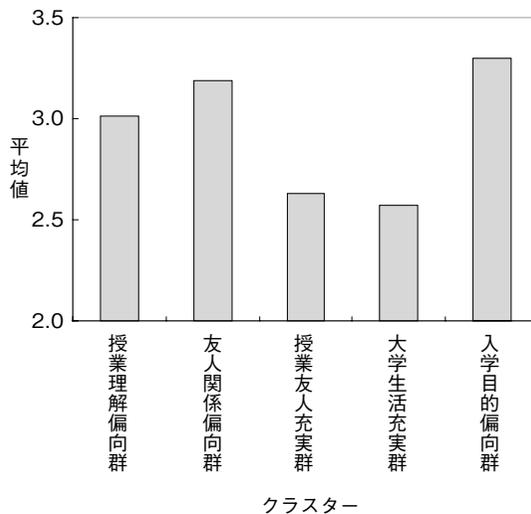


図2 5群ごとにみた大学不適應得点

大学生の大学適応に関する研究Ⅱ

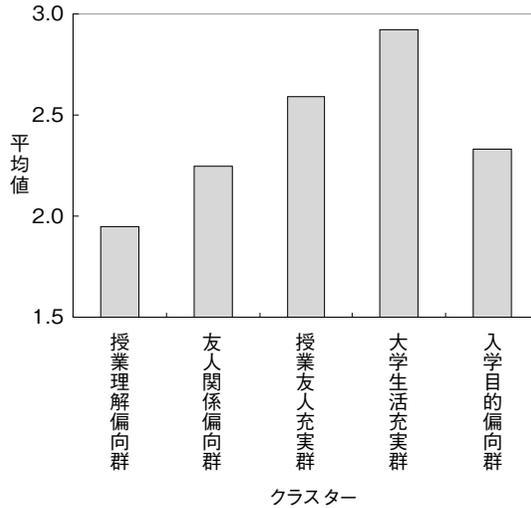


図3 5群ごとにみた大学満足度得点

学満足」を従属変数とする一要因5水準の分散分析である。その結果、「大学不適応」「大学満足」ともに主効果が有意であった（「大学不適応」： $F(4,170) = 11.04, p < .001$ 、「大学満足」： $F(4,171) = 10.97, p < .001$ ）。したがって、対象者のタイプによって「大学不適応」得点と「大学満足」得点は異なると言える。表3、図2、図3に5群の各得点を示す。

「大学不適応」得点の平均値は、『入学目的偏向群』『友人関係偏向群』『授業理解偏向群』『授業友人充実群』『大学生生活充実群』の順に高い。TukeyのHSD法（5%水準）による多重比較を行ったところ、『授業理解偏向群』と『大学生生活充実群』、『友人関係偏向群』と『大学生生活充実群』、『友人関係偏向群』と『授業友人充実群』、『授業友人充実群』と『入学目的偏向群』、『大学生生活充実群』と『入学目的偏向群』の間に有意な得点差が見られた。

また、「大学満足」の平均値は、『大学生生活充実群』『授業友人充実群』『入学目的偏向群』『友人関係偏向群』『授業理解偏向群』の順に高い。TukeyのHSD法（5%水準）による多重比較を行った結果、『授業理解偏向群』と『授業友人充実群』、『授業理解偏向群』と『大学生生活充実群』、『友人関係偏向群』と『大学生生活充実群』、『入学目的偏向群』と『大学生生活充実群』の間に有意な得点差が見られた。

## 考察

### 1. 大学不適応 3 要因による対象者の分類

松井・中村・田中（2010）において明らかになった大学不適応に影響する 3 要因である「入学目的」「授業理解」「友人関係」の得点を用いてクラスタ分析を行った結果、5 群を得た。各クラスタにおける 3 要因の得点の高低に基づき、これらを『授業理解偏向群』（16 名）、『友人関係偏向群』（37 名）、『授業友人充実群』（31 名）、『大学生生活充実群』（80 名）、『入学目的偏向群』（12 名）とした。これらの結果は、本稿の調査対象である女子大学生の多く（約 7 割）が、全般に充実した大学生生活を、あるいは、入学目的は曖昧だが授業理解と友人関係において良好な大学生生活をおくっていることを示している。一方、3 要因のうちある 1 つの要因のみが高い群も一定数（約 3 割）見受けられた。したがって、多くの学生たちは、概ね、充実した大学生生活を過ごしていると考えられるが、授業は理解できるが入学目的がはっきりせず友人関係も希薄である『授業理解偏向群』、明確な目的があって入学したが授業の理解度は低く友人関係も希薄である『入学目的偏向群』など、必ずしも充実した大学生生活をおくっているとは言い難い学生も少なからず存在することがうかがえる。言い換えると、大学生活において適応上、何らかの問題を抱えている学生が約 3 割を占めているとも言え、大学および現代青年を考えるうえで決して軽視することができない学生の実態を反映している。

### 2. 「入学目的」「授業理解」「友人関係」に基づく対象者の 5 タイプと大学不適応の関係

大学不適応 3 要因によるクラスタ分析の結果得られた 5 群において「大学不適応」と「大学満足」が異なるかどうかを検討した結果、対象者のタイプによって「大学不適応」と「大学満足」の得点に差があることが分かった。すなわち、『大学生生活充実群』は「大学不適応」が最も低く、「大学満足」が最も高い。次いで、『授業友人充実群』は「大学不適応」が 2 番目に低く、「大学満足」が 2 番目に高い。そして、3 要因のうちある 1 つの要因だけが高い 3 群では、「大学不適応」が高順位で、「大学満足」が低順位となっている。これらの結果は、入学目的が明確で授業の理解度が高く友人関係も良好である学生、および、入学目的は曖昧だが授業理解と友人関係が良好である学生が実際に適応的な大学生生活を過ごしており満足度も高いことを示している。一方、友人関係は良好であるが授業の理解度が低く入学目的も曖昧である『友人関係偏向群』、授業は理解できるが入学目的がはっきりせず友人関係も希薄である『授業理解偏向群』、明確な目的があって入学したが授業の理解度は低く友人関係も希薄である『入学目的偏向群』は、不適応的な大学生生活を過ごしており、大学生活に対して不満を持っていることが

うかがえる。

### 3. まとめと課題

松井・中村・田中（2010）は、大学不適応に影響する要因として「入学目的」「授業理解」「友人関係」を提唱した。本稿は、その調査データを追加分析し、これら3要因に基づく対象者のタイプによって、大学不適応および大学満足に違いが見られるかどうかを検討した。その結果、3要因すべてが高い『大学生生活充実群』と「入学目的」を除く2要因が高い『授業友人充実群』において大学不適応傾向が低く、大学満足度も高いことが示された。また、3要因のうちある1つの要因だけが低い群では大学不適応傾向が高く、大学満足度も低いことがうかがわれた。これらの結果は、「入学目的」「授業理解」「友人関係」は大学不適応に影響する要因であるが、個々の学生の大学適応を検討する際には、これら3つの要因がそれぞれどのくらいの水準であるのかを考慮することの重要性を示唆する。なぜならば、明確な目的を持って入学したものの授業についていけず友人関係も希薄である者や、目的は曖昧なまま入学したが授業の理解度は高く友人関係も良好である者など、3要因それぞれの高低の組み合わせによって大学生の実態も多様であると考えられるからである。3要因すべての高さが大学適応を促進することは、松井・中村・田中（2010）の結果を踏まえれば当然の帰結であると言えるが、「入学目的」を除く2つの要因が高い『授業友人充実群』の適応の度合いが高いことは、たとえ入学目的が曖昧であっても、友人と喜怒哀楽を共有しつつ、授業への取組みを通じてさまざまな知識を吸収することができれば、大学生活の質は自ずと向上することを意味する。このことは、“なんとなく大学に入学した”者が一定数を占めると思われる現在の大学における学生の適応を考える上で貴重な示唆を与えてくれる。

これらの結果をまとめると、学生の大学適応を推進するためには、その促進要因である「入学目的」「授業理解」「友人関係」をトータルに高めるような取り組みが必要であるし、少なくとも、大学不適応3要因のうち2つの要因で高い水準を維持することが大学適応にとっては重要であると言えよう。言うまでもなく、これらの知見を大学生の適応促進に生かすためには、個々の学生の実態を正確に把握することが不可欠である。しかしながら、個人情報保護および学生の自尊心が傷つくのを避けようとの配慮などに見受けられるように、現在の大学をとりまく状況は、個々の学生の実態把握を著しく困難にしている。プライバシーと自尊心を損うことなく、個々の学生の実態を掌握するための打開策を併せて検討していくことが必要である。

加えて、大学適応を促す3要因を高めるための具体的な方策も検討しなくてはならない。「入学目的」を明確にするためには、高校における進路指導への働きかけや、大学の広報活動およ

び入試形態など、検討すべき事項は山ほどある。本稿における調査では「入学目的」をその有無を尋ねることで抽象的に把握したが、今後は、入学目的を具体的に（例えば、資格取得を目的とするなど）尋ねるなどの工夫も必要であろう。また、「授業理解」はすでに多くの大学で取り組みが行われている習熟度別クラス編成や補習授業の開設をさらに強化していくことである程度の成果が期待できると思われるが、基礎学力が著しく劣ったまま入学してしまった学生への対応方法など、対策が急がれているものの、解決が容易とは言えない課題も多い。そして、「友人関係」については、学生間の交流を支援する試みに併せて、学生のパーソナリティ特性と友人適応との関連についても検討が必要であるといえよう。

## 文献

松井 洋・中村 真・田中 裕, 2010, 「大学生の大学適応に関する研究」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 21 巻第 1 号, pp.121-133.